

猜疑心及び共感性が虚偽検出能力に与える影響に関する検討

高橋 彩弥佳 (名古屋大学 大学院情報学研究科, t09sa14yu07ka27yo30ai@gmail.com)

北神 慎司 (名古屋大学 大学院情報学研究科, kitagami@cc.nagoya-u.ac.jp)

Effects of suspicion and empathy on ability to detect deceit

Sayaka Takahashi (Graduate School of Informatics, Nagoya University, Japan)

Shinji Kitagami (Graduate School of Informatics, Nagoya University, Japan)

Abstract

This study aimed to determine whether personality traits such as suspicion and empathy affect deception detection ability. We conducted an experiment based on the following two hypotheses: “People who are highly suspicious are likely better able to detect lies than those who are less suspicious” and “People who are highly empathetic are likely better able to detect lies than those who are less empathetic.” The 129 participants were shown videos of their turns to draw cards in the Old Lady card game. In the video, a woman randomly responded “yes” or “no” to the question, “Is this the Joker?” They had to answer whether they were “lying” or “not lying.” Thereafter, participants responded to a questionnaire measuring their suspicions and empathy (two factors: other-oriented reactions and perspective-taking). Multiple regression analysis revealed that, contrary to our hypothesis, personality traits such as suspicion and empathy do not affect deception detection ability. The reason that no significant results were obtained may be the need for an improved experimental method, such as the content and length of the false detection task used in the experiment.

Key words

deception judgments, individual differences, personality, suspicion, empathy

1. 問題

虚偽検出能力には個人差があるということが多くの先行研究によって明らかにされてきた (e.g, Mann et al., 2004; Vrij, Mann et al., 2006; Edelman et al., 2006) が、個人差を生じさせている要因については、明確な見解が得られていないのが現状である。例えば、個人差要因と虚偽検出能力の関連について調べた研究として、職業に焦点を当てたものがある。Meissner & Kassin (2002) は取調室の法執行機関の捜査官を、Ekman & O'Sullivan (1991) は連邦捜査局、国家安全保障局、麻薬取締局、カリフォルニア州警察および裁判官などを対象とした実験を行ったが、有意な結果は得られなかった。年齢と虚偽検出能力の関係について調べた先行研究も存在するが、こちらも明確な見解は得られていない (Aamodt & Custer, 2006; Vrij & Mann, 2005)。

虚偽検出能力の男女差について調べた先行研究では、初対面の場合、有意差は認められなかったが (DePaulo, Wetzel et al., 2003; Porter et al., 2007)、知人の嘘に関しては、男性より女性のほうが優れた検出成績が認められた (DePaulo, Wetzel et al., 2003)。また、氏家 (2010) は、嘘の検出能力と、個人的資質に起因する特性との関連を調べる研究として、認知スタイル (ES 理論) に基づくブレインタイプ (Empathizing type, Balance type, Systemizing type) を用いて嘘の検出能力との関連を検討した。各実験参加者の嘘の識別力及び判断バイアスを算出し、認知スタイルを要因として、識別力と判断バイアスのそれぞれ

について分析を行った。判断バイアスにおいては、認知スタイルによる主効果は有意傾向を示した。Systemizing 傾向が強い人は、何らかの基準を設け他者の嘘を判断しているのに対し、Empathizing 傾向が強い人は、判断の基準が試行ごとに切り替わっていることが示された。しかし、識別力では認知スタイルの主効果は示されず、嘘の検出能力と認知スタイルには関連が見られないという結果となった。

さらに、虚偽検出能力とパーソナリティ特性の関係について検討した研究では、社交不安の高い人は社交不安の低い人に比べて嘘の検出成績が低いと主張する意見がある (DePaulo & Tang, 1994; Vrij, Harden et al., 2001)。これは、①緊張することで注意の焦点が狭まり、得られる手掛かりが少なくなる。それにより、限定された手掛かりに注目しすぎ、ほかの重要な手がかりを見落とす、②低い自尊心の影響を受け、自分はおろかだという感覚、立場を失うことへの懸念など、課題に関係ない思考に気を取られやすい、③課題に無関係な心配が組み合わさると、ワーキングメモリに負担がかかり、もし十分に情報を処理し、重要な手がかりに気付いたとしても、間違っ解釈する可能性がある、といった見解である。

また、虚偽検出に役立つ重要な手掛かりとして、微表情というものがある。微表情とは、隠している感情をそっくりそのまま顔にあらわしたもの (Ekman, 1985) であり、500ms しか持続しないため、ふつうは見逃されてしまう (Yan, Wu, Chen, Liang, & Fu, 2013)。しかし、Ekman & O'Sullivan (1991) は、大抵の人びとは、一時間ほどの練習によって、微表情に気づくようになると主張している。ある表情を 1/15 秒だけ見せたところ、人びとは何も見えないしとてもできそうにないと述べた。しかし、写真に

どんな感情があらわれていたかを推測し、それから写真をじっくり調べ、実際にどうであったか確かめる、という試行を数百回繰り返したところ、一瞬の投影にも関わらず、人びとは表情を見分けることができるようになったという。この訓練によって、微表情を検知できるようになれば、人びとは嘘を検出する能力が上がるのである。また、Ekman (1992) は、経験豊かな臨床家たちは、訓練をしなくても微表情を検出できたと述べている。

このように、虚偽検出能力と職業や性格などの個人差要因の関係を明らかにした研究は少ないのが現状ではあるが、虚偽検出能力が経験や訓練によって影響を受けることを明らかにした研究も存在する。このことから、パーソナリティ特性などの側面によって日常的に他者の表情を注意深く観察する時間に個人差が生じていれば、虚偽検出能力に差が現れる可能性が考えられる。

例えば、共感性といったパーソナリティ特性は、他人のわずかな表情や心の動きに敏感であり、嘘の検出能力と関連があると考えられる。共感性はときに自己指向と他者指向の2つに弁別される(鈴木・木野, 2008)が、他者指向性の中でも、認知面に焦点を当てた「視点取得(Perspective Taking : PT)」は、自発的に他者の心理的観点をとろうとする傾向を示す。自己指向の中の認知面に焦点を当てた「想像性」は、観察者である自己を理解することを目的とし、「自分ならこう感じる」と自己を架空の人物に投影させるのに自己中心的な考えを積極的に働かせることが必要である。これに対して「視点取得」の場合は、観察対象である他者の理解を目的とし、そのために自己中心的な考えを抑えて相手の立場を受け入れることが求められる。また、他者指向性の中でも、情動面の応答の所産に焦点を当てた「他者指向的反応」は、共感的配慮(Empathic Concern : EC)とも呼ばれ、他者に対する同情や配慮など他者指向的な感情のことを指す。これらの、他者の心理状態に対する関心の強さや、他者の心理状態を把握し分かち合おうとするパーソナリティ特性を持つ人は、自然と日常的に人の細微な表情に敏感になり、嘘を検出する能力も高いのではないだろうか。

また、常に他人の言動を注視して疑いの目を向ける心として、猜疑心が挙げられる。金子(1999)は、猜疑心を被害妄想的心性の下位尺度の一つとしている。金子(1999)は、被害妄想的心性を「一般青年に見られる自己関連づけで、自己とは無関係かもしれない出来事を自己に被害的に関連づける傾向」と定義している。被害妄想的心性が高い人は、他者の何気ないしぐさや出来事を被害的に自己に関係づけて判断しやすい人である。もう一つの下位尺度である「自己関連づけ」は、被害的な自己関連づけが高い傾向を指し、他者の言動そのものよりも、それをすべて自分に対するものであると捉える傾向を指すため、自己に対する意識の過剰さを測る尺度となっている。よって、他者の何気ないしぐさや出来事を被害的に自己に関係づけて判断しやすい傾向を示す「被害妄想的心性」の中でも、特に他人の言動を疑い、敏感となっていると考えられる「猜疑心」が高いほど、嘘の検出能

力が高いのではないだろうかと考えた。

以上のことから、本研究の仮説を以下に示す2つとし、実験を行った。

- 共感性の高い人は、共感性の低い人に比べて、嘘を見抜く能力が高い
- 猜疑心の強い人は、猜疑心の弱い人に比べて、嘘を見抜く能力が高い

なお、共感性に関しては、鈴木・木野(2008)の尺度に従い、視点取得と他者指向的反応の2つの因子に分けて検討することとする。

2. 方法

2.1 実験参加者

実験参加者は、文書にて実験への参加の同意を得た大学生129名、うち男性42名、女性87名($M=20.0$, $SD=0.84$)であった。

2.2 実験計画

共感性の他者指向的反応と視点取得、猜疑心の3つの独立変数を高群、低群に分け、嘘の検出成績を比較する、1要因参加者間計画であった。

2.3 表出者映像作成

嘘の検出成績を測定する問題として、トランプゲームのババ抜きでカードを引く番を想定した、5～10秒程度の動画を作成した。

動画内の人物(嘘あるいは嘘でない表情の表出者)として、実験参加者と面識のない他大学の女子大学生1名(22歳)を起用した。表出者が手札を確認する際に顔が伏せないよう、顔の近くで手札を固定する為の台を作成し、手札を確認する際の表情もビデオカメラに映るように配慮した。台は、縦5.5 cm × 横30.7 cmの長さになるようにカットしたA4サイズの透明なカードケース(ハードタイプ)に手札を挟み、高さ12 cm × 幅35 cm × 奥行17 cmの無地の段ボールの上に固定したクリップ(高さ12.5 cm)で挟んだ。手札は、「ジョーカー」「ハートのA」「ダイヤのA」「クラブの2」「クローバーの2」の5枚を用意した。

高さ71.5 cm × 幅180 cm × 奥行60 cmの一般的な長机の上に台を置き、表出者と被表出者が対面するように椅子を置いた。被表出者が座る椅子の端から18 cmの位置に三脚を置き、三脚の高さを110 cmにし、被表出者の顔とビデオカメラ(JVC GZ-HM450)が隣に並ぶように固定した。固定した手札と表出者の距離は約1 mであったが、表出者にはなるべく自由に、楽な状態で臨んでもらった為、その距離はカメラに映る範囲内であれば表出者の気分によって自由に前後した。カメラの画角は、表出者の顔全体と肩が常に映像に映るように撮影した。

被表出者は5枚のうち1枚を指し、「これ、ジョーカーですか?」と尋ね、表出者には任意で「はい」もしくは

「いいえ」と答えてもらった。よって、完成した動画は、嘘をついているパターンの素材は、①「ジョーカーのカードを指されて『いいえ』と答えた」、②「ジョーカーではないカードを指されて『はい』と答えた」の2通り、嘘をついていないパターンの素材は、③「ジョーカーのカードを指されて『はい』と答えた」④「ジョーカーではないカードを指されて『いいえ』と答えた」の2通りであった。①の素材を10本、②の素材を26本、③の素材を11本、④の素材を13本ずつ撮影した。

映像がより日常の自然な状態に近くなることに細心の注意を払い、表出者には、カメラを意識しないでも良いこと、出来る限り自然に、友人とババ抜きで遊んでいるときの気分や立ち居振る舞い、くだけた心の状態を心掛けてもらうようにした。よって、表出者の意識はビデオカメラではなく、対峙し「これ、ジョーカーですか？」と尋ねている被表出者に向けられた映像となっている。

動画の編集には、Windows 10のビデオエディターを使用した。被表出者の「これ、ジョーカーですか？」の問いに始まり、被表出者がカードを抜く直前までをトリミングしたところ、1試行あたり5～10秒程度の長さの動画となった。表情を映すビデオカメラと同時に録画をした手札確認用のビデオカメラの記録と照らし合わせ、トリミング後の動画を「① J-N (ジョーカーのカードを指されて『いいえ』と答えた)」「② NJ-Y (ジョーカーではないカードを指されて『はい』と答えた)」「③ J-Y (ジョーカーのカードを指されて『はい』と答えた)」「④ NJ-N (ジョーカーではないカードを指されて『いいえ』と答えた)」の4種類に分けた。J-N、NJ-Y、J-Y、NJ-Nの4種類を、各々8本ずつ使用し(4種類×8本=全32問)、動画の種類や撮影の順序がランダムになるように並べた。動画と動画の間には、3秒間、黒の背景に「次の映像は○問目です」と書かれたシーンを挟んだ。本試行(全32問)の動画の長さは4分46秒であった。

2.4 質問紙

猜疑心及び共感性については、映像を見て答える問題(嘘の検出成績の測定)の後、質問紙にて測定を行った。

猜疑心の測定には、金子(1999)が作成した「被害妄想的心性尺度」の猜疑心因子である12項目を用いた。

共感性の測定には、鈴木・木野(2008)が作成した「多次元共感性尺度(MES)」の他者指向的反応と視点取得の2つの因子を用いた。他者指向的反応を測る質問は5項目、視点取得を測る質問は5項目であった。

実験参加者には、共感性、猜疑心どちらに関しても「1(まったく当てはまらない)～5(とてもよく当てはまる)」の5件法で評定を求めた。

2.5 手続き

実験参加者は講義室内の任意の座席に座った。最初に、この実験は嘘の表情検出に関する研究であることを説明した。正面にあるスクリーンを見て、5～10秒程度の動画から、動画内の女性が嘘をついているか、ついていな

いかを、表情やしぐさ、話し方などから判断してもらうよう伝えた。「嘘をついている」「嘘をついていない」の2択で回答してもらうが、「嘘をついている」パターン、「嘘をついていない」パターンにそれぞれ2通りの場合があることを説明した。また、非常に難しい試行である為、嘘をついているか嘘をついていないのか評定が難しくても落ち込む必要はないことを伝えた。実験参加者には、1回の例題、2回の練習問題のあと、32回の本試行に臨んでもらった。練習問題、本試行どちらも、評定が終わる毎に動画を「次の映像は○問目です」のシーンで一度止め、全員の評定が終了したことを確認したあとにふたたび再生した。映像を見て評定する試行が終わった後に、共感性と猜疑心を測る質問紙に回答を求めた。質問紙の最後に自由記述欄を設け、気づいたことや感じたことを自由に書いてもらうよう促した。

3. 結果

129名の実験参加者中、欠損の生じた7名を除外し、122名($M=20.0$, $SD=0.84$)を分析対象とした。

3.1 尺度の信頼性

使用した尺度の信頼性を確かめるために、猜疑心、共感性の他者指向的反応と視点取得に関して信頼性分析を行った。3つすべての α 係数を求めたところ、猜疑心の8項目では.724、他者指向的反応の5項目では.687、視点取得の5項目では.759と、信頼に足る基準を満たす信頼性を確認できたため、すべての質問紙項目を用いて分析を行った。

3.2 虚偽検出の正答率

虚偽検出成績について、信号検出理論に基づき、Lie条件の刺激に対し「嘘」と判断した数をHit数、Truth条件の刺激に対し「嘘」と判断した数をFalse alarm数、Lie条件の刺激に対し「嘘ではない」と判断した数をMiss数、Truth条件の刺激に対し「嘘ではない」と判断した数をCorrect rejection数として d' の算出を行った。その結果、実験参加者全体で $M=0.03$ 、 $SD=0.45$ であった。

3.3 d' とパーソナリティ特性との関連

目的変数に d' を、説明変数に猜疑心と共感性(他者指向的反応)と共感性(視点取得)、そしてこれらの交互作用項を投入し、階層的重回帰分析を行った。

まず猜疑心と共感性(他者指向的反応)と共感性(視点取得)を説明変数とした重回帰分析を行った結果、猜疑心($b=-0.007$, $t(118)=0.816$, 95% CI [-0.022, 0.013], $\beta=-0.085$, $p=.416$)と他者指向的反応($b=-0.025$, $t(118)=1.351$, 95% CI [-0.064, 0.013], $\beta=-0.162$, $p=.179$)と視点取得($b=-0.004$, $t(118)=0.026$, 95% CI [-0.035, 0.026], $\beta=-0.031$, $p=.789$)の効果は有意でなかった($R^2=.022$, $F(3,118)=.841$, $p=.474$)。さらに交互作用項を投入して重回帰分析を行ったが、交互作用は有意でなかった($R^2=.044$, $F(6,115)=1.026$, $p=.412$)。

3.4 自由記述欄で得られた内観報告

本研究では、質問紙の最後に自由記述欄を設け、解答中に気づいたこと、感じたことなどを自由に書くよう求めた。実験参加者 129 人中 80 人からの記述が得られた。

d' が $-0.73 \sim -0.45$ と低かった参加者の記述は、「同じに見えてきて難しかった。」「人の表情や言い方で嘘をついているのか判断するのはとても難しかった。」といった課題の難しさを示す内容や、「口調や語尾に注目した。」「表情の目を見ていた。」などの、自分なりに何らかの基準を設けて嘘を判断している記述もあった。「カメラの位置が時々変わっているのが気になった。目にハイライトがあたっていないので全体的に表情が明るく見えなかった。」という、動画の質（あるいは参加者の集中力）に課題が見られる記述もあった。

d' が $0.6 \sim 1.05$ と高かった参加者の記述は、「問題を解く時に、目を見て判断しました。」「『いいえ』と言うときに『いいえ↓』となるとときと『いいえ↑』となるとときがあった。」「『いいえ』を言う時に声のトーンや表情が上を向いたり高くなったりするのが気になる。断言している時としていない時の差があると感じた。解答が難しかった。」といった、正答数の低かった参加者にも見られた、自分なりに何らかの基準を設けて嘘を判断している記述があった。「疲れた (´・ω・`)」 「問題数が多すぎて最後まで集中できなかった」という、疲労感を示す記述も見られた。

また、「練習のときにまばたきの数が違ったことに注目していましたがこの実験自体にだまされている気がしてきました。」と記述した参加者の d' は -0.43 、猜疑心は 27 であり、「この女性はすべて演技しているように思った。」と記述した参加者の d' は -0.15 、猜疑心は 21 であった。

4. 考察

本研究の結果から、猜疑心及び共感性（他者指向的反応と視点取得の 2 因子）どちらも、虚偽検出能力に影響するという結果は得られなかった。

4.1 実験の手続き・方法について

仮説が支持されなかった理由について、実験の手続きや方法の面で考えられることが、2 点ある。

1 点目は、嘘の検出課題の妥当性である。本研究では、嘘の検出能力を測定するにあたって、嘘をついているか、ついていないかの評定を求める問題を独自で新たに作成した。トランプゲームのババ抜きでカードを引く番を想定した、5～10 秒程度の動画を作成し、その内容は、「これ、ジョーカーですか？」と尋ねられた表出者が任意で「はい」もしくは「いいえ」と答えている、というものだった。Ekman (1985) は、嘘の漏洩について「漏洩」と「欺瞞の手がかり」の 2 種類あると述べた。今回の課題では、嘘発見者である実験参加者に与えられた情報は「はい」もしくは「いいえ」の言語による情報と、5～10 秒という短時間の知覚的手がかりのみであった。「はい」もしくは「いいえ」のどちらか一言しかないため、虚言者がうっか

り真実を露呈する「漏洩」はそもそも有り得ず、虚言者の行動から導き出す知覚の手がかりも、日常生活における嘘の検出場面と比べると 5～10 秒間と短く、また極端に部分的であったため、「欺瞞の手がかり」も過度に少なく、嘘を検出する課題として不適切であった可能性が考えられる。

嘘に関する研究における実験の刺激材料として、木藤・児玉 (2003) は、男性 5 名、女性 5 名、計 10 名の大学院生のプロフィールに関するビデオ・クリップを用いている。被写体の 10 名には、実験者が配布した用紙に自己プロフィール（名前、生年月日、出身地、出身高校、高校時代に所属していた部活、家族構成、習い事、趣味、資格、子供の頃になりたかったことの 10 項目）の記述を求め、それらの記述に基づいて、被写体毎に「真」と「偽」の 2 種類のビデオ・クリップを作成している。透明性の錯覚に関する実験をした鎌田 (2007) は、5 杯のカルピスを準備し、そのうち 1 つに少量の酢を入れ、5 人になるべく無表情で飲むように教示し、その姿をビデオカメラによって撮影している。茶谷 (2017) は、微表情の動画をモーフィングによって作成し、表出強度を調整している。野口・吉川 (2010) は、不一致表出に関する研究に際して、ポジティブ（楽しさ）あるいはネガティブ（怒り、嫌悪）な情動喚起映像を視聴中の表情表出を、表出者映像として撮影した。情動喚起映像を視聴する際に、感じた感情とは逆の表情表出をするよう教示をし、意図的に表情表出を操作したものを不一致表出映像として作成している。本研究の課題作成に際して、ストーリー性や文脈のある映像を呈示すると、参加者個人の経験や思い出に判断が左右される可能性を考え、「ババ抜き」という比較的誰でも同じように経験したことのある場面を選択し、短時間の課題の試行数を増やすという選択をしたが、これらの先行研究に倣い、もっと長い課題動画を作成する必要性があったことが考えられる。

2 点目は、個別実験の必要性である。実験参加者から得られた自由記述の中には、「相手とのキョリ感が変わったたりして、判断するのに大変だった。」「カメラの位置が時々変わっているのが気になった。」など、映像内の表出者との距離感や位置関係について着目した記述が見られた。今回の研究は、個別実験ではなく集団実験によって実験を行っており、座席に座って正面の左側と右側の位置に 2 台スクリーンを備えた 150 人規模の講義室で、一斉に実験を行った。実験を行う前に、最前列や最後列、左右端の座席など、どの席からでもスクリーン内の表出者の表情を見ることができていることを事前に確認したが、スクリーンを 2 台とも使ったため左右どちらにも刺激が表示されていたことや、すべての実験参加者が真正面から映像を見ることが出来なかったことから、表出者との距離感や位置関係に着目していた実験参加者にとっては、正面から向かい合うことができない実験環境によって本来の虚偽検出成績を測ることが出来なかった可能性が考えられる。

こういった問題を解消するために、先行研究では、PC

画面に刺激を映し、個別実験を行っているものが多い。例えば、実験操作が虚偽認知に与える影響について検討した伊藤・森永 (2016) は、個別にコンピュータによる刺激提示を行っている。本研究も、こういった先行研究に倣って、個別実験によってより実際の対人場面に近い実験環境を用意する必要性があった可能性が考えられる。

4.2 自由記述欄について

また、本研究では、質問紙の最後に自由記述欄を設け、解答中に気づいたこと、感じたことなどを自由に書くよう求めた。そこでは、先述した氏家 (2010) の研究で示された、何らかの基準を設け他者の嘘を判断している、Systemizing 傾向が強い人や、判断の基準が試行ごとに切り替わる、Empathizing 傾向が強い人が見受けられた。何らかの基準を設け他者の嘘を判断している人の記述内容としては、「答える声が高かったり食い気味に答えていると、ウソついているのかなと思った。」「言い方と、『はい』か『いいえ』が言い終わった後の表情、目線を見ていた。」「目に注目していた。」などが挙げられる。このように、先行研究と同じく、本研究でも虚偽検出を行う上での判断バイアスの個人差が確認されたと言えるだろう。

4.3 今後の課題・展望について

本研究では、共感性と猜疑心の2つのパーソナリティ特性に焦点を当てたが、虚偽検出能力の個人差が何に起因するか明確な見解を得ることが出来なかった。問題部分で先述したように、虚偽検出能力の個人差が、性格や職業などによる個人特性により影響を受けているか否かを明らかにした研究は未だ少ない。

今回取り上げた猜疑心について、金子 (1999) は、猜疑心などの被害妄想的心性は他者意識や自己意識と深い関係を持つことを推測し、研究を行っている。他者意識尺度と自己意識尺度については、辻 (1993) によるものが使用された。重回帰分析の結果、猜疑心は他者意識および自己意識では十分に説明されず、つまり「猜疑心については他者意識および自己意識以外の他の要因を考慮する必要がある」と結論づけられている。他者意識尺度は①「他者のちょっとした表情の変化でも見逃さない」「他者の態度や表情を気をつけて見るようにしている」といった内的他者意識、②「人のことにしばしば思いをめぐらす」といった空想的他者意識、③「他者の服装や化粧などが気になる」「人の外見に気を取られやすい」といった外的他者意識の3つの下位項目からなり、自己意識尺度は①公的自己意識、②私的自己意識、③社会的不安の3因子からなっている。他者意識尺度の中でも特に内的他者意識について、他者の内的な部分に意識が向きやすい特性は、虚偽検出能力と深い関係があることが推測できる。今後、猜疑心や共感性以外にも、他者の心理状態に対する関心が強い他の特性と虚偽検出能力との関連について、検討する余地があると言えるだろう。

謝辞

本論文は第一著者である高橋彩弥佳が令和元年度に名城大学へ提出した卒業論文の一部を責任著者である北神慎司が中心となって第一著者とともに加筆・修正したものである。本論文のもととなった卒業論文を作成するにあたり熱心にご指導を賜りました名城大学人間学部の神谷俊次教授に心より感謝申し上げます。

引用文献

- Aamodt, M. G. & Custer, H. (2006). Who can best catch a liar?: A meta-analysis of individual differences in detecting deception. *The Forensic Examiner*, 15 (1), 6-11.
- 茶谷研吾 (2017). 微表情が人物の信頼性判断に及ぼす影響. 日本認知心理学会第15回大会発表論文集, P3-13.
- DePaulo, B. M. & Tang, J. (1994). Social anxiety and social judgment: The example of detecting deception. *Journal of Research in Personality*, 28 (2), 142-153.
- DePaulo, B. M., Wetzel, C., Weylin Sternglanz, R., & Walker Wilson, M. J. (2003). Verbal and nonverbal dynamics of privacy, secrecy, and deceit. *Journal of Social Issues*, 59, 391-410.
- Edelstein, R. S., Luten, T. L., Ekman, P., & Goodman, G. S. (2006). Detecting lies in children and adults. *Law and Human Behavior*, 30, 1-10.
- Ekman, P. (1985). *Telling lies: Clues to deceit in the market place, politics, and marriage*. W. W. Norton & Company. (エクマン, P., 工藤力 (編訳) (1992). 暴かれる嘘—虚偽を見破る対人学—, 第7版. 誠信書房)
- Ekman, P. & O'Sullivan (1991). Who can catch a liar? *American Psychologist*, 46, 913-920.
- 辻平治郎 (1993). 自己意識と他者意識, 第1版. 北大路書房.
- 伊藤洋輔・森永康子 (2016). 実験操作が虚偽認知に与える影響の検討—真実デフォルト理論に着目して—. 広島大学心理学研究, 16, 19-34.
- 鎌田晶子 (2007). 透明性の錯覚—日本人における錯覚の生起と保留の効果—. 実験社会心理学研究, 46, 78-89.
- 金子一史 (1999). 被害妄想的心性和他者意識および自己意識との関連について. 性格心理学研究, 8, 12-22.
- 木藤恒夫・児玉千絵 (2003). 嘘と本当を見分けられるか. 久留米大学心理学研究, 2, 37-48.
- Krauss, R. M. (1981). Impression formation, impression management, and nonverbal behaviors. In E. T. Higgins, C. P. Herman, & M. P. Zanna (Eds.), *Social cognition: The Ontario Symposium* (Vol. 1, pp. 323-341). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Mann, S., Vrij, A., & Bull, R. (2004). Detecting true lies: Police officers' ability to detect deceit. *Journal of Applied Psychology*, 89, 137-149.
- Meissner, C. A. & Kassin, S. M. (2002). "He's guilty!": Investigator bias in judgments of truth and deception. *Law and Human Behavior*, 26 (5), 469-480.
- 野口素子・吉川左紀子 (2010). 表情表出による情動調整

- が受け手の情動と対人印象判断に及ぼす影響—不一致表出に着目して—。対人社会心理学研究, 10, 147-154.
- Porter, S., McCabe, S., Woodworth, M., & Peace, K. A. (2007). Genius is 1% inspiration and 99% perspiration ... or is it?: An investigation of the impact of motivation and feedback on deception detection. *Legal and Criminological Psychology*, 12 (2), 297-309.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて—. 教育心理学研究, 56, 487-497.
- 氏家悠太 (2010). 嘘検出能力における個人差と判断バイアス—認知スタイルとの関連性からの検討—. 日本パーソナリティ心理学会第19回大会発表論文集, 2-8.
- Vrij, A., Harden, F., Terry, J., Edward, K., & Bull, R. (2001). The influence of personal characteristics, stakes and lie complexity on the accuracy and confidence to detect deceit. In R. Roesch, R. R. Corrado, & R. J. Dempster (Eds.), *Psychology in the courts: International advances in knowledge* (pp. 289-304). London: Routledge.
- Vrij, A. & Mann, S. (2005). Police use of nonverbal behavior as indicators of deception. In R. E. Riggio & R. S. Feldman (Eds.), *Applications of nonverbal communication* (pp. 63-94). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Vrij, A., Mann, S., Robbins, E., & Robinson, M. (2006). Police officers ability to detect deception in high-stakes situations and in repeated lie detection tests. *Applied Cognitive Psychology*, 20, 741-455.
- Yan, W. J., Wu, Q., Chen, Y. H., Liang, J., & Fu, X. (2013). How fast are the leaked facial expressions: The duration of micro-expressions. *Journal of Nonverbal Behavior*, 37, 217-230.

受稿日：2024年5月1日
受理日：2024年5月20日
発行日：2024年6月30日

Copyright © 2024 Society for Human Environmental Studies



This article is licensed under a Creative Commons [Attribution-Non-Commercial-NoDerivatives 4.0 International] license.

 <https://doi.org/10.4189/shes.22.75>